

『注文の多い料理店』における人間観
- 「動物を捕る外国人の姿」の描写を中心に -

アミーラ・サイード・アリッィ・ユースフ（博士）
エジプト、アル＝アズハル大学言語翻訳学部
日本語・日本文学科

نظرة على "الإنسانية" في قصة "المطعم ذو الطلبات المتعددة" - بالتركيز
على صورة "الأجانب صائدو الحيوانات" -

أميرة سعيد عليّ يُوسُف

قسم اللغة اليابانية وآدابها، كلية اللغات والترجمة، جامعة الأزهر، مصر.

البريد الإلكتروني: moslemamasriyaamira@gmail.com

المستخلص:

تعد قصة "المطعم ذو الطلبات العديدة" تحفة فنية ضمننتها المجموعة القصصية الوحيدة التي نشرها الكاتب والشاعر الياباني ميازاوا كينجي خلال حياته، والتي تحتوي على مجموعة فريدة من قصص الأطفال والروايات الطويلة للصغار، بل إنها تعد كذلك أحد روائع مؤلفها، إلى جانب "ساحة بورانو"، و"فتى الريح"، و"ليل قضبان المجرة"، و"سيرة جوسوكو بودوري"، و"جوش عازف التشيلو"، تلك القصص التي وصفها كينجي نفسه بأنها "روايات طويلة للصغار" في ملاحظاته التي دونها عن أعماله. هذا إلى جانب أن هذه القصة تم الاعتراف بها كمادة تعليمية يدرسها الأطفال اليابانيون في المرحلة الابتدائية. في هذه الورقة تم التركيز على منظور الإنسانية في قصة "المطعم ذو الطلبات المتعددة" للكاتب الياباني ميازاوا كينجي حيث انتهى البحث إلى أن "ميازاوا كينجي" عمد إلى تصوير صيد الحيوانات باعتباره سلوكًا غير مرغوب فيه وخارجًا عن الآداب والسلوكيات الإنسانية المحمودة، مشددًا على أنه فعل أناني مذموم لا يوجد ما هو أسوأ منه للدلالة على شرور البشر الذين تسول لهم أنفسهم قتل وصيد الحيوانات الضعيفة والعاجزة عن الدفاع عن نفسها.

الكلمات المفتاحية: الإنسانية، المطعم ذو الطلبات المتعددة، ميازاوا كينجي، الأجانب، صيد الحيوانات.

View of Humanity in "The Restaurant of Many Orders" -Focusing on the Depiction of "Foreigners Catching Animals"-

Amira Said Aly Yusuf

Department of Japanese and Japanese Literatures, Faculty of Languages and Translation, Al-Azhar University, Cairo, Egypt

E-mail: moslemamasriyaamira@gmail.com

Abstract:

"The Restaurant with Many Orders" is a masterpiece included in the only collection of stories published by Japanese writer and poet Miyazawa Kenji during his lifetime. This collection contains a unique collection of children's stories and novellas for young adults. It is considered one of its author's masterpieces, along with "Burano Square," "The Wind Boy," "Night of the Galactic Bars," "The Story of Gosukoubudori," and "Gouch the Cellist." Kenji himself described these stories as "long novels for young adults" in his notes that he wrote about his works. Furthermore, this story has been recognized as an educational material for Japanese children in elementary school. This paper explores Miyazawa Kenji's view of humanity in his representative work, "The Restaurant of Many Orders". In the light of this study, it seems that Kenji has deliberately tried to portray "hunting" or "the figure of a human hunting an animal" as an undesirable manner that is "out of line" with conventional human attitudes and manners, from the perspective that nothing highlights the evil nature of humans more than the act of hunting animals, which is a selfish and self-centered act of killing animals, which are weaker and more helpless than humans.

Keywords: View of Humanity, The Restaurant of Many Orders, Miyazawa Kenji, Foreigners, Hunting.

『注文の多い料理店』における人間観

－「動物を捕る外国人の姿」の描写を中心に－

アミーラ・サイド・アリッィ・ユースフ

エジプト・アラブ共和国、カイロ市、アル＝アズハ
ル大学言語翻訳学部日本語・日本文学科

Eメール：moselammasriyaamira@gmail.com

概要

『注文の多い料理店』は、宮澤賢治の生前に出版された唯一童話集の中の代表作だけではなく、賢治自身、彼の作品の題名列挙メモに「少年小説」と記した『ポラーノの広場』『風の又三郎』『銀河鉄道の夜』『グスコブドリの伝記』そして『セロ弾きのゴーシュ』などとともに著者賢治の代表作として知られており、日本国内の小学校の国語の教材として教科書にも掲載されている。

本稿において、宮澤賢治の代表作品としての『注文の多い料理店』における「人間観」について、考察した。恐らく、人間の間で行われる知覚や感情、思考、やり取り等というよりも、人間より弱くて無力な生き物としての動物の命をわがままで自分勝手に奪う、という捕獲行為ほど、人間の性悪さをますます浮き彫りにする行為はないという角度から、賢治は、「狩猟」あるいは「動物を捕る人間の姿」を、従来の人間態度・マナーから「外」れた態度で好ま

しくないマナーとして、意図的に描くことに努めたのであろう。

キーワード 人間観、注文の多い料理店、宮澤賢治、外国人、狩猟

はじめに

大正時代は 1912 年 7 月 30 日に始まり 1926 年 12 月 25 日に至る時代であり、宮澤賢治はその時代の 7 年目、詰まり 1919 年に童話を書き始めた。その時、1896 年生まれの賢治は未だ 23 歳青春であった。宮澤賢治は自分の童話の特質について、生前に私費で出版した唯一の童話集『注文の多い料理店』の「広告ちらし」の中で次のように述べている。

『どんなに馬鹿げていても、難解でも必ず心の深部に於いて万人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な文である。』。(宮澤賢治著 菊池武雄発行「新刊書御案内」『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』、杜陸出版部 東京光原社、一九二四、一一、一五日發行 (以下、「新刊案内」))、森本政彦発行『【新】校本宮沢賢治全集 第一二巻 童話〔V〕・劇・その他 本文編』、筑摩書房、一九九五年、前付 (p. [二]))

賢治による上述の言葉から言えるのは、宮澤賢治は、誰にでも共通する、特徴的な人間観を自分自身の童話を通して提供するように努めたということなのではないであろうか。果たして、賢治による人間観は彼の童話においてどのように描かれたのであろうか。本校においては、その題名が賢治の童話集の表題作となった『注文の多い料理店』をとり上げ、その童話における宮澤賢治の人間性に辿り着きたい。

『注文の多い料理店』について

『注文の多い料理店』は、1924年に、短編集で自費出版本として1000部出版された。当時発売元は、盛岡市の杜陵出版部と東京光原社であり、発行人は、盛岡高等農林学校時代の宮澤賢治の1年後輩にあたる近森善一であった。書名には本タイトルとしての「注文の多い料理店」のみならず、「イーハトヴ童話」という副題も付いていた。定価が1円60銭で、当時比較的に高価だったためか、結局殆どが売れ残った。

『注文の多い料理店』は、宮澤賢治の生前に出版された唯一童話集の中の代表作だけではなく、賢治自身、彼の作品の題名列挙メモに「少年小説」と記した『ポラーノの広場』『風の又三郎』『銀河鉄道の夜』『グスコブドリの伝記』そして『セロ弾きのゴーシュ』などとともに著者賢治の代表作として知られており、日本国内の小学校の国語の教材として教科書にも掲載されている。

作品概要

二人の青年紳士はイギリス風の獵師の服装をし、山奥で路に迷うのみならず、二人が連れて行った白熊のような犬は泡を吐いて死んでしまう。その時「山猫軒」という西洋料理店があることに気付く。二人は喜んで行ってみれば戸に書いてある金文字を目にする。中に入ると次々に戸があり、その表裏に奇妙な言葉が書かれていた。指示通り行くうちに、ついには自分が料理されて食べられることに気付く

と火に焼かれたように泣いたり叫んだりしてしまう。更に、後ろの戸は閉まり、鍵穴から二つの青い目が恐ろしく覗く。二人は恐怖のせいで顔が紙くずのようになってしまい、声も無く泣いてばかりいる。その際、亡くなったかと思った犬が二匹突然現れ飛び込んで来る。犬の吠える鳴き声を聞いた山猫もその山猫軒も煙のように消え、二人は犬に助かる。二人も震えながら草の中に立っていくが、紙くずのようになった顔は東京に帰ってお湯に入っても元の通りに戻らずに治らなかった。

人間観とは

『注文の多い料理店』における人間観を以下で論じていくが、その前に人間観に触れておかなければならない。

神 山 洋 介 は 「<https://www.mskj.or.jp/thesis/9585.html>」で言う。＜人間観を生み出す主体が人間自身であり、また人間観が人間の外見的な特徴でなく内面をも含む限り、絶対的な人間観は存在しない。強いて言えば、絶対的な人間観を生み出しうる主体は神（中略）繰り返しになるが、絶対唯一の人間観は存在しない。状況や立場によって、優先順位を置く人間観が異なることもあろう（後略）＞。

ここにおいては、「人間観が人間の内面をも含む」という点にも、「絶対唯一の人間観は存在しない」という点にも筆者はこだわりたい。本校において、賢治なりの人間観だけではなく、賢治自身の内

面を反映する「人間観」をも『注文の多い料理店』にたどり着いてみる。

『注文の多い料理店』における人間観

『注文の多い料理店』のテーマについて賢治は、童話集『注文の多い料理店』の「広告ちらし」の中で次ように紹介している。

二人の青年紳士が獵に出て路に迷ひ、『注文の多い料理店』に入り、その途方もない経営者から却って注文されていたはなし。糧に乏しい村の子どもらが、都会文明と放恣な階級とに対する止むには止まれない反感です。（「新刊案内」、（傍線引用者）、森本前掲書）

この紹介を支持する菅原弘士の解釈を引用する。

このことから、この作品は「都会文明への反感であり、軽薄で、しかも冷酷な人間を生み出していく文明社会への批判」を扱ったものと解することができる。更に、観点を変えて「二人の青年紳士」は派手な装いをこし、鳥獣を殺すことに何のためらいも感じない軽薄なえせ紳士であり、何事も自己に都合よく正当化していく利己的な人間の典型として描かれている。二人の紳士への嫌悪感から外装の一つ一つをはぎ取って死の直前まで追い込む懲罰を与えようとする意図がうかがわれる。殺生を避けて人間性に訴え、目覚めさせようとする、自己中心的自然破壊者への痛烈な教訓、批判」とも見ることができ

ようか」（菅原弘士『宮沢賢治の子ども像』、郁朋社、2004年、95頁）

菅原の解釈を加味しながら考察すると、宮沢賢治は『注文の多い料理店』という作品の背後に、都会文明への反感やそれに対する批判の世界だけが浮かび上がるか、という疑問点を提出しておく。単純化してゆくと、いってみれば、『注文の多い料理店』に現れた「イギリス風の獵師」に対し、疑問、あるいは保留を持っている。その作品において描かれた「動物を捕る外国人の姿の描写」そのものをどうのように受け止めるかは大きな問題であろう。

「外国人の姿」との描写については、後述するとして、まずは、「動物を捕る人間姿」換言すれば「狩獵」という描写から出発することにする。自らの健康を顧みず、農民の生活をはじめ農業技術等の向上のために、農家や農地を大切に作る組織を設立することに努め、晩年を、その最期の日まで捧げた賢治は、「鳥獸及び鳥類の卵は、捕獲等又は採取等をしてはならない」⁽¹⁾のもとに成った動物に対する態度や動物の扱い方等の規則や測定を守るとは、動物や環境のためどころか、主に人間のためだということを、早い段階で実感していたことが考えられよう。

このことから、賢治は、動物の扱い等を考慮して人間性を強調すべく、いわゆる「動物対人間」の

(1)「鳥獸保護管理法」

<https://www.wwf.or.jp/activities/opinion/1452.html>）を参考に。

相関関係の対照的な描写を中心に、人間に関する性善説と性悪説を捉えているといっても過言ではない。即ち、賢治は、「人間同士」のやり取りではなく、むしろ「動物対人間」の態度そのもののほど、人間の善悪を照明するものはないという角度から、『注文の多い料理店』における、賢治なりの人間観を描くことに努めたのではないかということである。

さて、次に照明を与えなければならないのは、「外国人」の姿そのものである。「都会文明と放恣な階級とに対する止むには止まらない反感」（森本前掲書）や「都会文明への反感」（菅原前掲書）等との見解が強調されているが、この点からも適切な解釈や検討が要求されるであろう。賢治は、「外」国人の姿を出して見せることを通して、そのような犯行を犯してしまったのは、「外」の国の「人」というよりも、「人」間観の原則から「外」れたものだ、というメッセージを間接的にかつ意図的に伝えることに努めたのではないか。

結論

以上、宮澤賢治の代表作品としての『注文の多い料理店』に触れたぐらいで、それにおける「人間観」について、簡単に述べてきた。

恐らく、人間の間で行われる知覚や感情、思考、やり取り等というよりも、人間より弱くて無力な生き物としての動物の命をわがままで自分勝手に奪う、という捕獲行為ほど、人間の性悪さをますます浮き彫りにする行為はないという角度から、賢治は、

「狩獵」あるいは「動物を捕る人間の姿」を、従来の人間態度・マナーから「外」れた態度で好ましくないマナーとして、意図的に描くことに努めたのであろう。

結びに加えて

最後に、いま一つ、余計な注釈を付け加えねばならない。賢治は『注文の多い料理店』においての、子供までの反感を買った青年の好ましくない振る舞いの描写を通して、大人にも子供にも通じる大事な教訓を提供するのであろう。これは自己中心者が利己的に行動すれば、利益を得どころか、むしろ損失を被るしかないという教訓だと言えよう。また、子供であろうと大人であろうと絶対に認められないそのような態度は、子供が犯した場合は、未成年者のためか分からないうちに犯してしまった可能性を念頭に置いたうえで、勝手な振る舞いの悪影響や悪結果等について真面目に教えたりある程度叱ったりすることは、まだ合理的に考えられることであろう。それに対し、大人が犯してしまったら、大人らしく行動するのが期待されることは当たり前のことだからこそ、換言すればもう子供では全くなく、すでに身も心も大人になったからこそ、増して激しくも厳しい賞罰を受けるべきだということには違いないと言っても過言ではない。これこそが、食われてしまうところから最後の瞬間に救出された二人の青年のみつともない様子で結された作品の結末から窺われることなのではないであろうか。

出典

宮澤賢治著 菊池武雄発行「新刊書御案内」
『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』、杜陸出版
部 （東京光原社、一九二四、一一、一五日発行）

森本政彦発行『【新】校本宮沢賢治全集 第一
二巻 童話〔V〕・劇・その他 本文編』（筑摩
書房、一九九五年）

主要参考文献

アミーラ・サイード・アリー『宮沢賢治の文学
における孤独感』（カイロ大学文学部日本語日本文
学科、2006年3月）

アミーラ・サイード・アリー・ユーセフ『宮
澤賢治の「少年小説」と利他意識についての考察—
「新しい、よりよい世界の構成材料」と「立身出世
の意味」を中心として—』（筑波大学人文社会科学
研究科国際日本研究専攻、2012年7月25日）

菅原弘士『宮沢賢治の子ども像』（郁朋社、
2004年4月27日）

神山洋介「人間観追求の意味」第24期、
<https://www.mskj.or.jp/thesis/9585.html>、2004/4/28

その他

「「鳥獣保護管理法」とは？成立の経緯とその
課 題 に つ い て」（
<https://www.wwf.or.jp/activities/opinion/1452.html>）

「鳥獣保護管理法の概要」 (<https://www.env.go.jp/choju/law/law1-1.html>) nature/

「人と動物の関係を考え、学ぶ ～アニマル・リテラシーを身に付けるための人と動物の関係学～」 (<https://www.alri.jp/?mode=f56#title4>、2023 年)

「野生鳥獣を捕まえること・飼うことは原則としてできません！」 (<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/t4i/cnt/f986/p10111.html>、)

